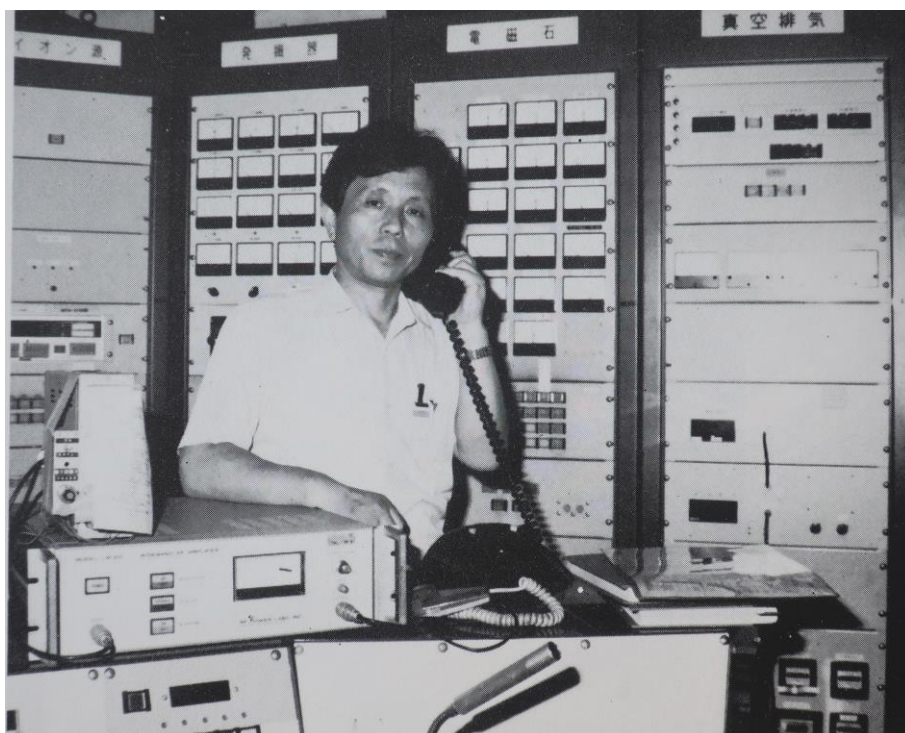


ミクロの世界に魅せられて。 (※1)

～ 無感動、無思考、没個性の生き方でなく、また各人が  
自由に個性を楽しみ、尊重しあって生きたいものです ～

高普第 10 回卒 長谷川 武夫 (※2)



母校の皆さんには、永い間ごぶさたしております。

私は、昭和 33 年、相馬高校を、新制の十回生として卒業致しました。

同年、東北大学理学部に進み、昭和 41 年、同大学院博士課程を 2 年で中退し、京都大学理学部物理教室の助手になりました。

昭和 47 年に、東京大学原子核研究所に助教授として移り、現在に至っています。

そんなことで、学位（理学博士）は、京都大学で取得しました。

昭和 57 年から約 2 年パリ郊外のフランス国立サチューン原子核研究所に滞在し、共同研究しました。

#### (仕事の内容)

私たちのまわりの物質は、原子が沢山集まってできているのですが、その原子の中心にあつて、物質の質量の 99.9 パーセントを担っているのが、原子核というものです。

原子核は、湯川先生の考えつかれたパイ中間子などの働きによって、陽子や中性子が、たいへん強い力で結びつけられていて、原子の 10 万分の 1 位の大きさしかありません。この結合エネルギーが大量に解放されるのが原子力です。

最近では、この自然界で最も強い力の秘密は、より小さなクォークというものが基本になっている、と考えられています。

このような、自然のミクロな世界の成り立ちや相互作用を、実験的に研究しているのが私の仕事です。

ものすごく堅く小さい原子核や素粒子ですから、サイクロトロンやシンクロトロンとよばれる加速器によって、強力なエネルギーを持った粒子線を作り、それを物質に当て、原子核がどんな壊れ方をしたかなど観測し、その構造や反応のメカニズムを調べます。

ちょうど、おもちゃを不思議がって壊してしまう、赤ん坊と同じことをやっているようなものです。

(メッセージとは言えないものですが)

「この東大生や、東大の受験生の中で、高校時代に、何かに感動したり、熱中したり、悩み考えたりしたことのある人が、いったいどれだけ居るのだろうか？」よく入試の監督をしている時など感ずる疑問です。そして、そんな無感動・無思考・没個性の「エリート」が社会に出て行くのは、怖い感じがします。

パリなんか、いつ行っても犬のフンなど多い街ですが、なんとも言えぬ郷愁を感じるんです。相馬へ帰った時のような。いろんな人間が、自由に、それぞれの個性を楽しみ、尊重しあって生きている、生まの人間の寄り合いを覚えるんです。

知識や技術は、必要になった時に一生懸命になれば身につくものです。しかし、一人の人間としての感性や物の考え方は、一朝一夕にできるものではなさそうです。

私なりに、他人に負けない自分のポジティブな面を考えた時、それらは、大らかで人間味あふれた相馬の歴史と風土の中で、中学・高校時代に培われたものであるような気がします。

母校の皆さんに負けぬよう、“はるかア かなたはア 相馬のオ 空かヨー、” というのを、どこでもいつでも、誇りに支えに、やっている次第です。

(※1) 創立90周年記念誌『紅の旗』(1988(昭和63)年9月2日発行)

「今こそ伝えたい、希望と勇気を～OBから若駒への熱きメッセージ～」より。

(※2) 昭和33(1958)年卒、中村出身。東京大学原子核研究所助教授 理学博士。

(転記&※脚注 村山)